

とんとんむかし

菜の花が咲くころのことです。

ある日、きれいな女のお遍路へんろさんが、町のはずれを通りかかりました。お遍路さんは、お腹に赤ちゃんがいきました。ところが、急に体の具合が悪くなって、橋のたもとで倒れてしまいました。町の人たちは、お遍路さんを近くの家に運びこんで、介抱しました。けれども、そのかいもなく、お遍路さんは死んでしまいました。町の人たちは、お遍路さんを龍澤寺りゅうたくじのお墓にうめました。

それから二、三日たったある晩遅く、お寺の近くの駄菓子屋の店先みせまきに、きれいな女の人が出て来ました。女の人は、消え入るように小さな声で、

「あの、遅くにすみませんが、飴玉あめだまをひとつください」といって、一文銭いちもんせんを出しました。

駄菓子屋の主人は、

「あんまり見かけない顔だけれども」と思いながら、飴玉を包んで渡しました。女の方は喜んでお礼をいって帰って行きました。

次の晩遅く、また女の方が駄菓子屋の店にやって来ました。そして、

「あの、遅くにすみませんが、飴玉をひとつください」といって、また一文銭を出しました。

女の人は、その次の晩も、また次の晩も、飴を買って行きました。

六日目の晩、主人は、あの女の方はいったいだれだろうと思って、飴玉を買って帰る後をこっそりつけて行きました。すると、女の人は、龍澤寺の山門さんもんに入って行きました。

主人も後に付いて入りましたが、もう女の人のすがたはありませんでした。

その次の晩、女の人は、飴を買いに来ませんでした。主人は、

「毎日来ていたのに、どうしたんだろう」と心配になって、龍澤寺に行ってみました。山門を入ると、お墓のほうから、かすかに赤ん坊の泣き声がしました。主人は気味が悪くなって、家に走って帰りました。

夜が明けると、駄菓子屋の主人は、町の人たちに、このことを話しました。そして、みんなで相談して、龍澤寺に行ってみることにしました。お墓に行くと、ゆうべ赤ん坊の声が聞こえて来たのは、新しく立てたお遍路さんのお墓でした。そこで、みなでお

墓を掘り起こしてみると、そこに、赤ん坊がすやすやと眠っていました。

お遍路さんは、お墓の中で赤ん坊を生んで、幽霊になって飴を買ってきて赤ん坊になめさせていたのです。みんなは、

「ほんとうに、かわいそうなことだ」

「親というものはありがたいものだ」といいあいました。そして、赤ん坊を龍澤寺で育ててもらったことになりました。

赤ん坊は、大きくなるととてもりこうになって、やがて、りっぱなお坊さんになりました。みんなは、そのお坊さんを、幽霊和尚さまと呼んだということです。

村上郁 再話

資料 『伊予の昔話』和田良誉編／日本放送出版協会